

くものいと

第13号
10-VIII-1993
関西クモ研究会
大阪府茨木市

深泥池のミズグモ発見記

西川 喜朗

本年3月10～11日に和歌山県美里町のセミナーハウスで、日本蜘蛛学会大会の準備の下見・打ち合わせを行った際、もういちど深泥池のミズグモを調べに行こうということになった。

「まあ、見つかる可能性は少ないやろなあ」

「いやあ、きっとどこかにおんで」とか

「久しぶりに、みんなで楽しもうや」という人やら、さまざまであった。

「まだ深泥池を調べ尽くしていない。浮島のまわりも、まだ調べてみる余地がある」と、私も思った。そして、なによりも、時々このように的をしぼって採集・観察会を行うことは、参加者の意気が盛り上がって、たいへん良いことだと思っている。

そこで、京都市の許可を得て、本年（1993）3月27日（土）に、再び深泥池の生物調査をさせていただいた。参加者は、隊長の吉田真さんはじめ、加村隆英、加村昌枝、金野晋、牧野達也、浅井元朗の各氏と私（西川）の合計7名であった。

当日、私は少々縁起をかついで、ついているパンツ、ついている方の防水時計、そしてクモの巣模様の台湾のお守りなどを身に付けて出発した。地下鉄北山駅10時集合。われらが隊長の吉田さんは、なにやらあわてている。

「（調査許可の）腕章忘れた！小屋の鍵も、浮島の鍵も忘れた！家においてきてしもた！」と、吉田さん。

駅で再び吉田さんを待つ間に、ミズグモ観察のポイントをもう一度復習する。
①ミズゴケのあるところ。細いイネ科、カヤツリグサ科の植物が混じってもよい、②魚の入って来にくい水たまりの縁、③水の臭くないところ、④池の縁をアミですくうか棒でかまわす、……

加村、金野の両氏と私の3人は、鉏路湿原でのミズグモ採集の経験者である。今回はボートを使わずに、まず本命のミズゴケが多く見られる浮島を調べるこ

とにした。池の東側をまわり、浮島のルートに入る。池の水量は多く、前回より水位が10cmほど上がっている。浮島の中の歩道(?)を進みながら、浅い水たまりやそのまわりのミズゴケが生えているところを。手網ですくったり、手でかきわけたりやっても、”ピラタミズグモ”ばかりであった。そうこうしながら、歩道を半ばまで進んだところで、青々とミズゴケが茂っているところがあった。

「こんな感じのところや。もうちょっと水たまりが広がったらええのにな」と、吉田さんとコケをかきわけていると、一足先を行っていた加村さんが、

「おった！おった！」と叫んだ。

「やったあ！」、「やっぱりおったか！」

加村さんの声を聞いて、みんな集まってくる。5×10mぐらいの水たまりの縁だ。水深は20～30cm。

「ミズゴケが、オーバーハングになってて、下の水が冷たいとこや」と、加村さん。手ですくい上げた彼のすぐ右どなりでやっていた加村昌枝さんは、

「いた、いた」と、次々に声をあげる。「またいた、あ、泳いでいる」

「加村夫人、すごいなあ」と、感心ばかりしている吉田さんは、しばらくの間は自分で発見できない。牧野さんと浅井さんは、採れたところの感じをつかむと、少し離れたところで別のポイントを探している。

結局、その付近で、一名を除く全員が数頭ずつ発見した。

「なんぼでもおるわ、こいつちっさいわ」と、いつも余裕顔の金野さんは、別の水たまりの縁で見つけた子供のクモを、次々と逃がしてやっている。

そして、やっとみんなに余裕が出てきたころ、3mmに満たないような子グモは、ふたたびもとの池に返す。合計10数頭を持ち帰って、一部は標本に、残りは飼育することにした。これらの性別と体長は表1のとおりであった。

おおざっぱにみて、このときのミズグモは、大・中・小の3つのサイズ・グループに分けられる。すなわち、小は2.5～3.5mm、中は4.4～5.3mmの幼生、大は6.2mm以上で成体(♂6.5、♀8.0)・亜成体(♂6.2～6.7)・幼体(6.7)を含む。このことから、小はおそらく昨年生まれ、中は一昨年生まれ、そして大は3年前に生まれたものと思われる。

表1にみられるように深泥池ではミズグモのオスはメスより小さかったが、北海道・青森などでは成体の体長はおおむね7～15mmで、オスは通常メスより少し大きい。津軽半島の池や釧路湿原で9月に得られた個体では、10mmを越すものもかなりあった。今回のクモのサイズが相対的に小さいのは、越冬後まだ本格的な活動シーズンに入っていないからか、生息環境が必ずしも最良でないからかもしれない。

表1. 深泥池産のミズグモ (March 27, 1993採集) の性別と体長

性別／成長段階	体長 (mm)
<u>持ち帰って測定</u>	
♀成体	8.0, 8.0
♂成体	6.5
♂亜成体	6.7, 6.6, 6.2
幼生	6.7, 5.3, 5.0, 5.0, 4.9, 4.8, 4.4, 3.5, 3.5
<u>測定せず池に戻す</u>	
幼生 (10数頭)	3.5 ~ 2.5

当日の水温は15℃で、クモがよく見られたミズゴケの間の水温は10℃であった。言うまでもなく深泥池は、昭和5年(1930)に吉沢覚文氏によって、わが国で最初のミズグモの1♀1♂が発見された池である。その後1977年に吉田真氏により1♂(体長7mm)が発見されたが、前者はタヌキモ、後者はミズゴケの間から、それらの水草を採集後に偶然に発見されたものである。

さらに、1982年6月には加村隆英氏により、ピットフォールトラップで得たクモ類の中に1♀成体が、後日になって発見されている。最初の発見以来、この池はこれまでにたびたび調査されてきたが、これら以外の記録はない。

したがって、このたび深泥池の中でミズグモの確かな生息環境が観察され、多数の個体が確認されたことは、貴重な記録となった。

おわりにあたり、調査にご協力いただいた皆さんと、前回(1991.9.23)の調査に参加された吉田真、田中穂積、加村隆英、伊藤千都子、金野晋、細田みどり、平松毅久、牧野達也、西條雄介の皆さんに厚く御礼申し上げる。

キノボリトタテグモ *Ummidia fragaria*
(Doenitz, 1887) の巣の方向

金野 晋

キノボリトタテグモは日光の直射しない岩の上や樹皮上に片扉の巣を下向きに作るといわれている。また、その巣の多い木はクス、マツ、スギなどといわれる。

中平は各種の記録からキノボリトタテグモが巣を作った樹種を23種あげ、またその営巣場所は必ずしも日陰でないことを述べている（続クモのふるまい, 中平, 1992）。

キノボリトタテグモを採集しているときに、1本の木で上下左右の4方向の巣を観察したことや、崖・石垣などからも多数採集したことがあったので、その巣の方向と母材の選定について調査してみた。

方法

調査は1992年の10月～1993年の5月におこない、千葉、三重、滋賀、京都、奈良、大阪、和歌山、鹿児島の各地で観察した。

巣はキノボリトタテグモと確認できるものすべてを対象とし、クモのいない空の巣も含めてその開口部の方向と母材を記録した。開口部の方向は母材の壁面を正面から見て巣の中心軸線を8方向に区分した（図1）。母材が木の場合は樹種を確認するようにつとめた。同じ巣を2回カウントすることのないように、一度調査した地点は、前回調査時に発見した巣をすべて取り除いた場合などを除いて、再調査をおこなっていない。

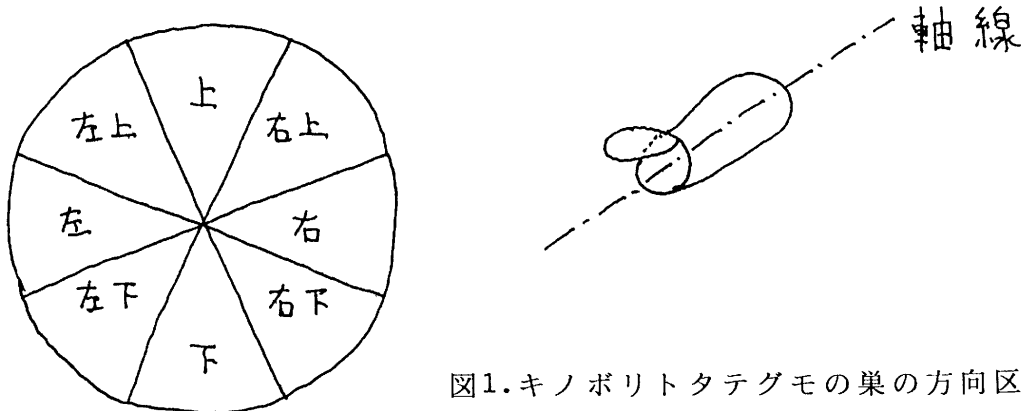


図1.キノボリトタテグモの巣の方向区分

結果

確認したキノボリトタテグモの巣は合計119個である。中にクモがいたもの32個、死骸のあったもの1個、クモがいなかったもの86個であった。このうち樹木に作られていたもの72個(60.5%)、岩の上や土の上に作られていたものは47個(39.5%)であった。やや樹木に多いが発見のしやすさなどもあり、キノボリトタテグモが木を好むとはいえないと思われる。また、特定の樹種に限って生息するものではなく、生息が確認できた樹種は以下の15種であった。

スギ、ヒノキ、モミ、カヤ、イロハカエデ、タブノキ、イチイガシ、ツツジ、ツバキ、ウバメガシ、カシ、クスノキ、ケヤキ、サクラ、不明種。

これらの木は比較的樹皮がやわらかいものが多いようだが、樹皮の硬さの定量化ができず印象によるものなので、その傾向については特に述べない。

樹木以外ではコケむした岩壁が多く、古い石垣や大谷石のような穴の多い石材、また、石垣の間の目地、土壁の上のコケの塊の中などにも巣は見られた。

この結果から、キノボリトタテグモは樹木にのみ生息するものではなく母材の状況がよければどのような場所でも生息できるものと思われる。

開口部の方向別の巣の数は以下の表とグラフ(図2)に示した。

表 巣の方向と確認数

方向	数	比率(%)
上	19	16.0
右上	0	0.0
右	16	13.4
右下	8	6.7
下	55	46.2
左下	9	7.6
左	11	9.2
左上	1	0.8
合計	119	99.9

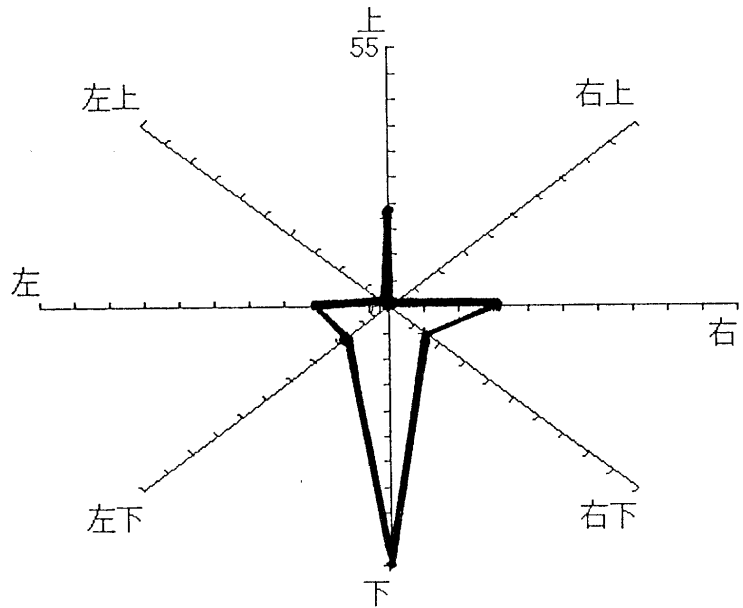


図2. 巣の方向(確認個数)

巣の方向を上下と水平に区分すると、上向き20個、下向き72個、水平27個である。約60%が下向きとなり下向きが多いようだ。しかし、一般にいわれているように「必ず下向きに作る」と決まっているわけではない。石垣の間に巣を作っている場合はほとんど水平に作っているものも見られた(図3)。

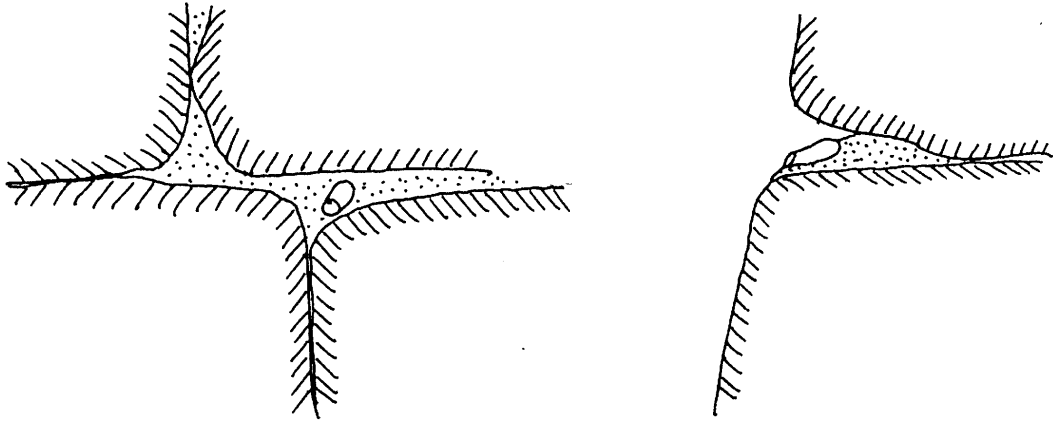


図3. 石垣の間に作られた巣(左 正面より、右 断面図)

スギの樹皮上では木肌に巣を作っている場合は樹皮の目に沿って上向きか下向きであり、枝の跡に巣を作っている場合は多くの場合向きが水平であるが一定しない。

岩の上に巣を作っている場合は、岩の割れ目に沿っていることが多い。

また、母親の古巣を利用することもあるようで、大型の古い巣の中に小型の巣が見られたものもあった。

調査中に、ハチの繭が入っている巣を見かけた。ハチは採集できず種類の確認はできていないが、寄生性の種であると考えられる。

考察

キノボリトタテグモは周囲の母材を削り取りかき集めて巣を作るようである。そのため、母材はある程度やわらかいものであればなんでもよく、特に好みがあるとは思われない。また、多くの場合は母材にへこみをつけて巣を作るようであるが、岩のように自らが掘ることができないようなもの場合は、周囲のコケをかき集めて綴り合わせただけの巣を作ることがある。ただ、完全に平たい場所に作るよりはへこんだ場所に作るほうが好ましいようで、岩の節理面や石燈籠の継ぎ目などを利用することが多い。

巣の方向は決まっていないようだが、下向きを好む傾向はある。しかし、利用しやすいへこみがある場合はその方向にあわせることの方が多いと思われる。

仕事の合間に、いつでもどこに出すという当てもないまま気まぐれに書いている雑文がある。今回「くものいと」に何か記事が欲しいという編集者からの依頼があったので、その一部を出すことにした。大して参考にはならないと思うが、暑さしのぎの気楽な気持ちで読んでいただければ幸である。と同時にお気づきの点をお教えいただきたい、それがまた次の話題を生むかも知れないから。

1. hatterは帽子屋かクモか

人のひどく気の狂った状態を表現する句として、“mad as a hatter”というのがある。この hatterとは何を指しているか、またなぜこの状態を as a hatterとしたのであろうか。

有名な L. Carrollの Alice in Wonderland (1865)の中に気の狂った Hatter が登場するが、このことから hatterを帽子屋と解することができる。昔は帽子製造人はその材料のフェルトをカールするため、水銀を使用したので、その水銀毒におかされて気が狂うというのである。一般にはこの説が信じられているようである。

ところが別の説では、hatterはクモのことだという。ある時、ある大学院の学生で、直喩 (simile) について研究している人から「hatterをクモと解するならばクモのどのような行動を以て”クモのように気の狂った”ということになるのか」という質問が来た。私は hatterにクモの意味のあることは何かで見た記憶があり、調べ直してみた。

私の持っている書物の中で、Century Dictionary (1914)のほかに、クモ学者の書で Staveley, E. F.の British Spiders (1866)と Bristowe, W. S.の The World of Spiders (1958)に hatterのことが出ていた。いずれもアングロサクソン語の Atter-coppa (Poison headの意) = Spiderに由来し、これが atter→hatterとなったとの説明があり、hatterはクモの意味もあることがはっきりしたが、mad as a hatterの理由の説明はなかった。このような問題は私にはまったく専門外のこと、どなたかご存知の方があれば教えていただきたい。

ちなみに精神病の一種に「不思議の国のアリス症候群 (Syndrome of Alice in Wonderland)」というのがある。Carrollの作品と関係がありそうだ。生態学者の多い会員のお知恵を借りたい。

2. ルブロンオオツチグモ

世界最大のクモとして有名なものにルブロンオオツチグモ Theraphosa leblondi (Lat., 1804)がいる。このクモの学名は原記載では Mygale Blondi Latreille, 1804となっている。その後属の変更があって、最近では Theraphosa leblondiとして多くの学者に用いられている。

しかし、原記載以来は70年余りは種名として blondiが用いられていた。この間に Lucas (1837)は leblondiとすべきことを提唱したが、1880年のKarschまではほとんど省みられなかった。1892年に Simonが Lucasの意見を容れて以来、一部の学者（たとえば Petrunkevitch, 1911や Gertsch, 1949）以外は Simonに従い、leblondiを用いて今日に到っている。Bonnetはこれらのいきさつを述べながらも leblondiとした。

姓に Laや Leのつくフランス人の姓を使用するときはこれらの冠詞をもくっつけることになっており、命名規約にもそのことが記されている。トタテグモで La Touche氏に献名された属名が、Latouchaとなっているように、冠詞をつけて使用するのが正しい。ただ問題なのは原記載が Blondiであるために問題が起こる。この問題は命名規約委員会の仕事であろうが、参考のためおもな変遷を次ぎに示しておく。

ブラジルのクモ学者に聞くと、最近は blondiを使用しているとのことである。

	<u>blondi</u>	<u>leblondi</u>
1804	Latreille	
1805	Walckenaer	
1818	Lamarck	
1837		Lucas
1864	Simon	
1871	Ausserer	
1874	Moggridge	
1880	Karsch	
1892		Simon
1907		Strand
1909		Warburton
1911	Petrunkevitch	
1928		Savory
1932		Berland
1942		Roewer
1949	Gertsch	
1959		Bonnet
1986		Smith
1993		Marshall
		Uetz

次に学名に人名が使用されている場合、発音は原則として原音通りがよいとされている。この場合 Le Blond氏はルブロンであるが、学名の場合これに i がついた場合はどうなるか。原音がルブロンであるからルブロニーとなるかという、そうはいかない。氏名に i がついた場合はラテン語化されたものとみなされるので、lebrondiはルブロンディーとなる。一方、フランス語の発音に従った場合は、lebrondiはルブロンで dはサイレントであるが、i がついた場合はリエゾンによって、dが発音される。いずれにしても leblondiはルブロニーとならず、ルブロンディーとなるのである。同様のことは Meta menardiでも言える。Menardはメナールであるが、i がつくるとメナルディーとなる。Berlandベルランの場合も同様で berlandiはベルランディーである。

余談ながらこのルブロンオオツチグモの標本は1991年に大阪に来られたブラジルのクモ学者 Pedro Ismael氏にもらって持っているので、拙宅にお越しの節にはお目にかける。♀成体で体長9 cmで、でっかい瓶に入っている。

3. クモ退治用スプレー

中平さんの「続くものふるまい」を読んでいて思い出した。昭和57年11月であったか、クモ退治用のスプレーが発売されたというので、東京の若い人達が「こんなものを売るとはけしからん。発売元に出かけて抗議しよう」といきまいたことを聞いた。その中の2人から「大阪でも発売されるだろうから、発売中止に協力してほしい」旨の手紙が来た。私は大して気にしていなかったので、「そっとしておきなさい。そのうちに影をひそめるだろうから」と返事しておいた。しかし、ことクモに関することなので、そのままにしておけない自分のこと、どんなものか知りたい気持で近くの薬局や園芸用品店に当たったが、どこにも「そんなものはおいていない」という返事。ところが明けて昭和58年4月末のある日、新聞の折込広告に種々の害虫退治のスプレーが出ていた。ダニ、ゴキブリ、ナメクジ、ワラジムシ、ガ、ヤスデ、アリ、カタツムリあるわあるわ、このなかにクモスプレーというのがあった。

販売店名やその場所が示されていたので買いに出かけた。家から2 kmぐらいだが、電車ではかえって不便なところだったので、歩いて出かけた(58.5.3)。店につくなり、定価598円のを2本購入、1本は西川氏に進呈した。「売れてますか」と聞くと、「まだ誰も買いにけえへん。大将が始めてや」という。「ああよかった」とひとりごとを言った私を変な顔で眺めていたのを思い出す。薬屋さんに申しわけないが、これでよいのだ。採集に使えるかも知れないが、あれから10年たった今、そのまま標本として戸棚に保管してある。やがて珍品になるかも。

4. くすねぐもの正体

だいぶ古い話であるが、遠藤周作氏の周作恐怖譚第一話「蜘蛛」が週刊新潮（34.7.9号）pp.69-74に掲載された。この中にくすねぐもという名のクモが登場する。記事によれば、このクモは人の血を吸った痕に尻から針を出して小さな卵を生みつける。卵からかえった幼虫は人の皮ふのなかで血を養分として成長するという。この患者の一人の女性は最初は皮ふ病かと思って東大の皮ふ科で診てもらったところ、珍しくくすねぐものかみ痕だと分かったという。また、「灰色で脚の長いクモで南支那や台湾にいるが、九州でも山村で時々見つかる。でも東京の世田谷にいるとは思ってもよらなかった」という話も出ている。

以上は遠藤氏の記事の中の怪談会に出席した人の話の一部である。

この作品は大学の国文学の教科書にも採用されており、学生その他から「くすねぐもとはどんなクモか」とよく聞かれた。クモの中でこんなのを知らない私はダニではなかろうかと思ってダニ学者に尋ねたところ、ダニの中にはこのような習性を持ったものがあると聞いた。たぶん実際はダニであるが、目に見えないので近くに普通にみられるクモをくすねぐもとして結びつけたものであろう。としてみると、どのクモにくすねぐもの名を当てたのであろうか。クモの色彩形状分布からイエユレイグモかアシダカグモでなかろうかと思ったが、人体の上を這いまわるのであるからユレイグモではない。とすればアシダカグモであらうか。

最初の記事が出てから30年余りたった昭和63年6月20日（2:00-3:00 P.M.）、大阪で毎日放送（4ch）で、これが劇映画化され、現代怪奇サスペンスの一つとして放映されたのを見ることができた〔早川プロ製作、エイコーテクニカ製作協力、山口崇主演〕。

画面に登場したくすねぐもは、アシダカグモであった。模型や実物が使われていた。ストーリーは遠藤氏作品が忠実に描かれていた。正体不明のくすねぐもを、ごく普通にみられるアシダカグモと結びつけたものであろう。

このTV製作に関係した人の一人として、萱嶋泉先生の名が出ていたので、なるほどとうなずけた。（つづく）

ユアギグモの一種 Patu sp. の新産地

新海 明・金野 晋

近畿地方でユアギグモの一種の新産地を確認したので報告しておく。

兵庫県

宝塚市上佐曾利素蓋鳴神社

1993. Jul. 4. 1♀ 細田・金野

奈良県

吉野郡川上村武木口

1993. May. 2. 5exs 新海・金野

吉野郡下北山村池峰明神池

1993. May. 3. 6exs 新海・金野

吉野郡野迫川村赤谷

1993. Jun. 27. 1♂1♀3exe 金野

吉野郡十津川村谷瀬

1993. Jun. 27. 7exe 金野

和歌山県

東牟婁郡本宮町湯峰

1993. Jun. 28. 5exe 金野

三重県

尾鷲市高峰山南谷(L.C. C3610-3401)

1993. May. 4. 4exs 貝発・塩崎・新海・金野

なお、7月に行われた合同合宿で熊野市に多数生息することが確認されたが、それらの記録は別途発表されると思われるので今回は含めなかった。

個体数は兵庫県を除いて各地点とも少なくはない。木口、赤谷、谷瀬、湯峰、南谷では道沿いの岩壁に巣が多数見られた。南谷では古い卵のうち1個確認している。また、明神池では林道の土壁に少数の巣が見られ、古い卵のうち複数確認している。上佐曾利の素蓋鳴神社では1個体だけしか確認できなかったが、石垣の間に垂直に近い円網をはっていた。

末筆ながら、尾鷲市の南谷を案内していただいた貝発氏と塩崎氏にお礼申し上げます。

吉野・新宮・熊野のクモとりある記

附ツクネグモの造網過程

新海 明

今年（1993年）、5月のゴールデンウィークを利用して、紀伊半島の熊野地方で行われる夏の合同合宿の下見をかねて、金野晋さんと二人で奈良県吉野から和歌山県新宮市を経て三重県熊野市までクモを採集する機会があった。ここでは、その際に観察したクモのリストとツクネグモの造網過程について報告する。なお、観察はほとんど下見の合間に行った目撃によるもので、標本は一部を除き採っていない。

金野晋さんには車で案内をしていただいた上に採集を手伝っていただき、貝発憲治さんと塩崎哲哉さんには熊野市周辺の案内をお願いした。ここに御礼申し上げます。

以下の目録の学名については原則として八木沼（1986）に従った。

奈良県吉野郡川上村武木口（1993. 5. 2）

<u>Pholcus crypticolens</u>	ユウレイグモ
<u>Theridion yunohamense</u>	ユノハマヒメグモ
<u>Argyrodes fissifrons</u>	チリイソウロウグモ
<u>A. nipponicus</u>	ツノナガイソウロウグモ
<u>Linyphia yunohamensis</u>	ユノハマサラグモ
<u>L. nigripectoris</u>	ムネグロサラグモ
<u>Ogulnius pullus</u>	ヤマジグモ
<u>Mysmenella jobi</u>	ナンブコツブグモ
<u>Patu sp.</u>	ユアギグモの一種
<u>Uroctea compactilis</u>	ヒラタグモ
<u>Agelena limbata</u>	クサグモ
<u>Anyphaena pugil</u>	イツツグモ

奈良県吉野郡下北山村池峰明神池（1993. 5. 3）

<u>Ummidia fragaria</u>	キノボリトタテグモ
<u>Pholcus crypticolens</u>	ユウレイグモ
<u>Phoroncidia pilula</u>	ツクネグモ
<u>Argyrodes nipponicus</u>	ツノナガイソウロウグモ

<u>Linyphia longipedella</u>	アシナガサラグモ
<u>L. yunohamensis</u>	ユノハマサラグモ
<u>L. nigripectoris</u>	ムネグロサラグモ
<u>L. japonica</u>	ツリサラグモ
<u>Labulla contortipes</u>	アシヨレグモ
<u>Theridiosoma epeiroides</u>	カラカラグモ
<u>Ogulnius pullus</u>	ヤマジグモ
<u>Mysmenella jobi</u>	ナンブコツブグモ
<u>Patu</u> sp.	ユアギグモの一種
<u>Uroctea compactilis</u>	ヒラタグモ
<u>Araniella</u> sp. A	ムツボシオニグモ
<u>Zilla sachalinensis</u>	カラフトオニグモ
<u>Hypososinga sanguinea</u>	シロスジショウジョウグモ
<u>Acusilas coccineus</u>	ハツリグモ
<u>Cyclosa octotuberculata</u>	ゴミグモ
<u>C. laticauda</u>	キジロゴミグモ
<u>C. argenteoalba</u>	ギンメッキゴミグモ
<u>Chorizopes nipponicus</u>	ヤマトカナエグモ
<u>Tetragnatha squamata</u>	ウロコアシナガグモ
<u>Misumenops japonicus</u>	コハナグモ
<u>Myrmarachne japonica</u>	アリグモ

和歌山県新宮市速玉神社 (1993. 5. 3)

Dictynidae gen. sp.	ハグモ科の一種
<u>Ariadna lateralis</u>	ミヤグモ
<u>Enoplognatha transversifoveata</u>	カレハヒメグモ
<u>Anelosimus crassipes</u>	アシプトヒメグモ
<u>Argyrodes fur</u>	フタオイソウロウグモ
<u>A. cylindrogaster</u>	オナガグモ
<u>Neoscona scylla</u>	ヤマシロオニグモ
<u>Zilla astridae</u>	サガオニグモ
<u>Cyclosa octotuberculata</u>	ゴミグモ
<u>C. laticauda</u>	キジロゴミグモ
<u>Argiope amoena</u>	コガネグモ
<u>Agelena limbata</u>	クサグモ

Oxytate striatipes

ワカバグモ

三重県熊野市五郷町湯の谷 (1993. 5. 4)

Theridion yunohamense

ユノハマヒメグモ

Linyphia yunohamensis

ユノハマサラグモ

L. fusca

クスミサラグモ

L. japonica

ツリサラグモ

Theridiosoma epeiroides

カラカラグモ

Mysmenella jobi

ナンプコツブグモ

Neoscona scylla

ヤマシロオニグモ

N. sp.

ヤミイロオニグモの一種

Zilla sachalinensis

カラフトオニグモ

Dolomedes saganus

スジアカハシリグモ

三重県熊野市井戸町大馬神社 (1993. 5. 4)

Achaearanea tepidariorum

オオヒメグモ

Theridion subadultum

コケヒメグモ

Enoplognatha transversifoveata

カレハヒメグモ

Linyphia yunohamensis

ユノハマサラグモ

L. fusca

クスミサラグモ

Labulla contortipes

アシヨレグモ

Theridiosoma epeiroides

カラカラグモ

Conoclus lyugadinus

ヨリメグモ

Metleucauge yunohamensis

メガネドヨウグモ

Agelena limbata

クサグモ

ツクネグモの造網過程の観察

1993年5月3日に奈良県吉野郡下北山村池峰の明神池においてツクネグモの造網過程を観察した。本種の造網過程についてはすでに報告した(新海, 1991)が、今回観察したものはそれとは少し異なっていたので、ここに記録する。

発見したのは午前10時10分ころで、明神池の周遊路沿いのヒノキの造林地の崖の枯れたシダの葉下であった。ツクネグモはメスの成体で、粘糸を張っているところだった。糸はほぼ垂直に張られており、クモは前方のしおり糸を手繰り寄せながら、後方から粘糸を出して宙吊り状態 (a living bridge) で進んで

いた。上部の2cmほどを残した部分で粘糸を張り終えてそのまま上へ行き、シダの枯れ葉の下に来ると反転して占座して造網行動を完了した。

完成した網は一本の糸だけでできていてその長さは21cmであり、そのうちのほぼ中央の16cmの部分が粘糸であった。筆者がかつて千葉県清澄山で観察した本種の造網行動では粘糸を張り終えて上方で反転したあとで、「その糸を切り今度は第3、4脚を使って『後ずさり』しながら後方の糸を巻き上げていった」と記したが、ここで観察した個体はこの「後ずさり」の行動がなかった点に違いがみられた。

引用文献

新海明, 1991. ツクネグモの造網行動. *Kishidaia*, (62): 1-2.
八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305p., 保育社, 大阪.

おわびと訂正のお願い

「くものいと第12号」にミスがありました。以下のように訂正させていただきます。

1 ページ

19行: Pholocidae → Pholcidae

2 ページ

9行: contoripes → contortipes

3 ページ

12行: tricuspидatus → japonicus

奥付け

庶務・会計 加村隆英 → 庶務 加村隆英
会計 山野忠清

関西クモ研究会

会長	西川喜朗
編集	吉田 真
庶務	加村隆英
会計	山野忠清

くものいと 第13号

1993年8月10日発行

発行者 関西クモ研究会（代表西川喜朗）

〒567 大阪府茨木市西安威2-1-15

追手門学院大学生物学研究室内

T e l . 0 7 2 6 - 4 3 - 5 4 2 1

（内線5113西川研、5106加村研）

F a x . 0 7 2 6 - 4 3 - 5 4 2 7